

講評文

12月25日 4番目

津島北翔高校

「藍より青い海」

この劇は第二次世界大戦の青函連絡船が沈没した事件を船の目線から見た物語でした。船をつけた演者さんを見て、はじめは何の話かわかるのに時間がかかりました。第八青函丸や第七青函丸は石炭を運ぶ船ということが分かり、しかしその船たちは戦時中で軽く安く使い捨てのために作られた船でした。さらに、彼らには実は兵器が仕込まれており、いつ米軍が襲ってきても攻撃できるようにされていました。それは船たちの使命でした。彼らが、その使命は果たせなかったけど、最後に人に幸せを運ぶ使命に辿り着けたことに感動しました。

私はまずこの作品のテーマは戦争の愚かさと使命だと感じました。船たちがメインなことで、船にも心があるという感覚に気付かされました。つまり、人だけでなく何もかも壊される戦争はほんとに悲惨なことだと気付かされました。与えられた使命を果たそうとして沈んだ船たちと、使命を果たせなかったけれど、その使命から抜け出した船たちは新しい使命を見つけましたことに、心を動かされるものがありました。

私が衝撃を受けたのは舞台装置と音響です。舞台装置は何も置いてないのでとても広く感じる舞台でした。私は何もないからこそ海の広大さを表しているのかと思いました。音響は何も無く全て演者が声で表現していました。これには2つの考えがあると思いました。1つ目は舞台が海なため機材を使わず声で表現したと考えました。音が全て警報や弾丸の音など声が揃っていてすごいと思いました。2つ目に戦争は全て人が始めたので人で全てを表現していると解釈出来ました。

私が次に注目したのは波の表現の仕方です。人が一定数入ってきて腕をウェーブさせて表現してました。この一定数の人数が感覚を保って移動してるのがすごいなと感じました。船の移動方法も再現度が高いと思いました。船の速度によって歩きのスピードを変えるのも細かいと思いました。照明はホリの色に注目しました。戦争後のホリの色がまさに藍より青い海だと感じました。

船の小道具が頭から落ちないことなど、舞台装置は何もありませんでしたが細かいところまで全て情熱を持って頑張っていた津島北翔高校さんの熱意を感じました。

素晴らしい上演をありがとうございました。